

## 馬千里日記考 (1)

浜 口 允 子<sup>1)</sup>

## On the Diary of Ma Qianli

Nobuko HAMAGUCHI

## ABSTRACT

During the early Republican period, a group of what we might call “middle-ranking intellectuals” played a major role in shaping history. Ma Qianli, who is the focus of this study, was one such intellectual. He resided in Tianjin for most of his life, and worked primarily in the field of education. His 45-year life can be characterized not only by his career as an educator but also by his active involvement in the movement for “national salvation.” These activities began with the May Fourth Movement in 1919. This point is the focus of this paper, which will look specifically at activities related to the National Assembly. The life of Ma Qianli can be unveiled because he kept a diary everyday for 23 years. This diary is invaluable for grasping the ideas and activities of Ma Qianli and the young intellectuals who survived the turbulent days of modern China. This paper explains the circumstances of the handing down of this diary and evaluates its potential as a source for understanding modern Chinese history.

## 要 旨

中華民国前期は、歴史の形成に当って中間的知識層の担った役割が大きい時代であった。ここに取り上げる馬千里もそうした知識層の一人に数えてよいであろう。彼はその生涯のほとんどを天津で過ごし、主としてこの地の教育にあたった。だが、教育者であると同時に、彼の45年の生涯を大きく彩るものは、「救国」をめざす社会的活動であった。1919年の五四運動がその契機となるものであったといえよう。本稿はこの点を中心に述べ、特に国民大会に注目している。こうした馬千里の生涯が明らかになるのは、彼が成人して以来23年間日記を書き続けたからである。近代中国の激動の時代を生きた馬千里など若い知識人群像の動向を知るためにも、この日記は貴重である。そこで本稿は、この日記が現在に伝えられた経緯を述べるとともに、この日記がもつ中国近代史における資料としての価値や可能性についても言及した。

馬千里 (1885～1930)

教育者、社会活動家。名は仁声、天津の人。北洋大学露文専科卒業 (1906)。次いで上海振華学校 (1907)、天津南開中学 (1908) の英文、数理を卒業。張伯苓の推薦により南開中学教員 (1912)、直隸女子師範監学 (1915)。1917年天津教育考察団に参加して日本を視察訪問。1919年五四運動に際して天津各界聯合会副会長、日貨排斥委員会主席。1920年1月運動のなかで逮捕、7月釈放。9月『新民意報』を創刊。1921年達仁女校の初代校長。1923年薬王廟小学校長、天津教育局第一区教育委員。1925年天津県議会議員、参事会参事。1927年中国国民党に加入、28年党務指導委員会委員。南開校友総会天津分会主席、天津赤十字会幹事長、副会長。1930年3月1日病没、享年45歳。

<sup>1)</sup> 放送大学教授 (「人間の探究」専攻)

## I. 「馬千里日記」について

### 1. 「馬千里日記」とは

馬千里は少年のころから日記を書く習慣があったというが、現在目にすることができる日記は成人後の1908年から脳出血で倒れる前日（1930年2月16日）までの23年間分23冊である。だが、彼の没後中国社会が闊した激動と、それがこの家族に及んだ苦難の歳月をふりかえれば、23冊に及ぶ日記がそのまま保存されてきたということは貴重なことであったといわねばならない。1937年、盧溝橋事件を契機として日中戦争が始まると、天津は日本軍の占領下におかれ、遺された一家は長男馬秋官が働く四川省重慶に向けて避難することとなった。一家は全ての家財を売りはらい、衣類など身の回りの品と父親の「日記」のみをもって海路天津をはなれた。そして途中香港でその後の道中の困難を考え、中国銀行香港支店經理をつとめるかつての教え子に「日記」の保管を依頼して四川に向かった。しかし太平洋戦争の勃発により、その後相互の連絡は途絶え、「日記」の所在は不明となり、家族はそれが既に失われたと思っていた。だが18年後の1956年、「日記」は銀行の倉庫で発見され家族の下に戻った。そこで家族は「23年分の日記」を父親の生きた時代を示す歴史資料と考え、これを天津歴史博物館に収めたのである。こうして、20世紀前半の一時代を生きた一人の知識人による記録が残されたのである。

今次、‘中国近代史における現在無名の人物を一人取り上げ明らかにする’研究企画にのっとり、馬千里に着眼して、その生涯を知るべく下記日記資料を入手したところから、当該企画を進める前段階として、ここに馬千里および「馬千里日記」につき些かの考察を行なうこととした。本稿を記す所以である。ただ近年における天津歴史博物館の大規模な建替えと移転にともない、原資料は現在非公開となっており現物をそのままみることはできない。そのため、本稿において今回使用した「馬千里日記」に関する資料は主として以下の4点からなる。

- ① 天津社会科学院歴史研究所がかつて原資料を全期間にわたって書写摘録したもの。

これは同歴史研究所所長張利民氏の許可とご配慮によりその全てを整理し、再録し、入手することができた。

- ② 以下の時期について原資料をそのまま複写したものの。1915年2月1日～5月1日、1919年3月1日～5月20日、1919年11月14日～12月31日、1920年7月2日～9月30日、1922年11月5日～12月31日、1923年1月1日～2月5日、1923年2月18日～5月31日。

これは中国女性史研究会の末次玲子氏が1990年代初頭に同館に依頼して複写したもの。今回は末次氏のご厚意により参照することができた。

- ③ 「馬千里先生日記摘抄（1908～1930）」（馬翠官編

『二十世紀初天津愛国教育家馬千里先生』中国人民政治協商会議天津市委員会文史資料研究委員会発行、1985、89～142頁）。

これは1985年馬千里の生誕百周年にあたって次女馬翠官が父の日記から重要と思われるところを抜粋したもの。同書には、生前の馬千里と親交のあったものや教え子たちがそれぞれに記憶のなかにある馬千里について寄稿しているほか、馬千里自身の遺稿がいくつか収められている。

- ④ 馬秋官、馬珠官、馬翠官、馬桂官、馬宝官編「馬千里先生年譜」1980。編者は馬千里の子女5名、父親の没後50周年を記念して馬翠官を中心に編纂したもの。その前書に拠れば、これは全ての「日記」と関連する資料を精査し、年譜のかたちでその生涯の行動を明らかにしたものである。このため、前述の理由から現在明らかにならない期間の状況を知るためには、この「年譜」が有用である。

さて、日記は書き手によって様々な傾向を示すが、「馬千里日記」の場合、その性格は日々の記録そのものであるといつてよい。記されていることは——時期によって違いはあるものの——備忘録そのものであり、例えば、自身の日々の思いと行動と発言、訪ね・訪ねられて接した人の名前とその間の話題、積極的に或いは受動的に一定期間関わっていく事項とその経緯、関心を持って書き留めた情報、そして絶え間なく家庭に生起する様々な問題等についてである。しかもそれは、個々の事例について内容に立ち入って詳細に述べるものではなく、また関わった事態について特に深い考察が披瀝されているものでもない。だがそれは、事柄の記録と時々的心情を中心に記されていることにより、まさに一知識人が置かれていた社会及び家庭の時代状況そのものを明らかにしているといつてよいであろう。我々は、その記録を読み、記録に伴走することによって、各時期の社会を覆っていた時々主要テーマについて、それを基層の生活から間断なく見ていくことができるのである。この点が本「日記」のもつ価値の一であろう。本稿がこの「日記」を素材とすることで、そこに描かれている当時無名の人たちの行動をみながら、五四運動を前後する時代の若い知識人と当時の時代状況について考えようとするのはこの故である。

### 2. 「馬千里日記」のもつ資料としての可能性について

前項では、資料としての「馬千里日記」と、本稿で取り上げる主たるテーマについて述べたが、本論に入る前に、ここで同「日記」がもつ資料としての更なる可能性について若干付け加えておきたい。即ち、本「日記」に記されている多様な内容は、この時代の以下に例示するような幾つかの側面についても、その歴史像を検討するに当たって一定の有用な資料となり得るものと思われる。そうした幾つかの側面は、馬千里

が常に心に掛けていた問題であるが故に「日記」に頻出するからであり、それらは当時の社会について何しかの有効な情報を我々に与えてくれるのである。それが概ねどのようなものであるかを知るために、ある一日（1920年3月11日）の日記を示そう。

今日は何も仕事が無かったので、幾つかの社会問題について考えた。婚約問題について、男女の交際問題について、包辦結婚について、独身主義について、家庭組織の問題について、女子教育について、女子参政権について、宗教問題について、姓氏改造について、工讀について、貧民教育について、国貨提唱について、社会呼称について、妾婢廃止運動について、娼妓廃止運動について。

要は、これらの問題が馬千里にとっての常に底流をなす関心事であり、その故にしばしば日記に書き記されてきたテーマなのである。そこで、同「日記」に言及するこの機会に、同日記がもつ資料的意味について敢えて女性史、女性問題を中心に3点ほどを取り上げ、記して記憶にとどめることとする。

### (1) 婚姻

清末および1910年代の「日記」からうかがわれる馬千里の考え方は近代化志向を特徴とするものであった。なかでも最も明瞭に見て取れる彼の主張は、教育、とくに女子教育の重視と、新しい女性のあり方の追求、そして結婚と家制度への批判に特徴があり、従ってその面への言及が多い。それは原理的な男女平等観を述べるのみならず<sup>1)</sup>、自らが関わり発起した「婦女改良会簡章」<sup>2)</sup>や「天津県天足会簡章」<sup>3)</sup>等についても書き記しており、清末天津の社会状況の一端をうかがわせるものである。同様に極めて強い主張が記されているものが婚姻制度についてであって、馬千里は一度親の決めた包辦結婚をし（1904）、死別（1905）しているところから、日記の中でこのような過去を否定し、くりかえし新しい結婚を主張している。その主張は五か条の条件からなるもので、そこに盛られた教育の重視と旧習の打破は極めて厳しいものである。さらに清末にしてすでに詳細な結婚の式次第を提唱しており、自らそれを実践した。即ち、馬千里は1910年9月30日、張伯苓の妹張冠時と結婚したが、自ら案出したその式は、数百名の客の前で「質素で真摯な新式結婚式」<sup>4)</sup>として行われ、その折の写真は「改良婚礼画」と題されて画報社の門前に展示され、以後の天津社会に影響を与えたと伝えられている。

### (2) 教育

女子教育について「日記」は各年にわたって記述が多い。それは馬千里自身が、第一には社会の近代化を求めるオピニオンリーダーとして女子教育に強い関心を示し、その振興に努めた故であり、第二には教育経営者として女子学校の維持運営に直接携わったからで

ある。一については、馬千里は生涯にわたって女子教育を重視し、関心をもち、折に触れ女子教育の必要性を述べてきた。清末時点からすでにその点に言及し「我国女子が多く入学することを望む」<sup>5)</sup>と記している。また1917年2月に行なった講演「中国女子問題の研究」<sup>6)</sup>では、女性にとって学習が如何に必要であるかを力説したと記しており、教育は家庭との関係においても、社会との関係においても、国家との関係においても必要であり、そのために自分は果たすべき責任を果たしたいとしている。さらに1917年4月から6月の間、馬千里は日本への教育視察旅行を行なっているが、その際参観した35校中21校が女子学校であった<sup>7)</sup>。そのような女子教育に対する熱意ゆえに、1917年9月、彼が日本留学を勧めてきた妹が自らその機会を捨てると極めて激しい怒りを日記に記している<sup>8)</sup>。それは女子教育の必要に加えて、先の日本視察の経験から、彼が日本の教育状況を評価し、そこに日本の近代化の基盤があることを認めていた故であろう<sup>9)</sup>。

次に、二については、関連する記述があまりに多いところから、ここではその説明を省くほかはない。特に馬千里は、1921年8月に新設の達仁女校の校長に就任して以来、1926年12月、この年の李景林軍による校舎の占拠と破壊によって同校が閉校するに至るまで、5年間その職にあった。従ってこの間の「日記」には同校における教育と運営に関する事柄が多く書かれており、そこに本「日記」の一つの見どころがあるともいえるのである。そしてそこに描かれているものは、日記ゆえの瑣末な事象にしても、動揺する人間像にしても、まさに動いている時代の表象としてとらえる価値があると思われるのである。

### (3) 家

「馬千里日記」を読む中で、それが日記であることを痛感するのは、馬千里が家と家族の重圧に一貫して呻吟する記述によってである。彼は、公の場では女子教育を鼓吹し、新しい結婚の形を主張し、五四時期からは国の独立と統一を求める運動を主導するという新しい人間像をみせるが、その一方私的生活のなかでは大家族による物心両面からの重圧のもとにあり、真に安寧のときを持つことができない苦悩多き姿を示した。

馬千里の家は、父が旧官僚で広西省の知州であったが、民国成立前に退官し、はじめ浙江省紹興に、ついで天津に移った。父は妻との間に子供を3男6女（馬千里は次男）もうけたが、在任中から2人の妾をもち、その間にも5、6人の子供が生まれた（4人成人）<sup>10)</sup>。この関係は母を悩ませ、母は代償として子供を溺愛したため、長男はアヘンを嗜んで多年失業の日を送り、三男は放蕩のすえ学校も除籍となった。馬千里はこの没落し争いの絶えない大家族に苦しみ、厭い、のち家を出て核家族をつくったが、しかし生涯その重圧からはのがれられず、むしろ自ら父母に孝である規範を守りつづけた。清末から民国にかけての一つの旧い家の没落と、その改造を求めつつも強く束縛される次世代

の動向という観点からもこの「日記」を読むことができる。

以上、その資料的意味として3点について述べたが、この他にも、生活史、報刊史、五四期以来の活動家の系譜など同「日記」から読み取り得る情報は少なくない。しかし当然のことながら、「馬千里日記」もまた、とくに近代の日記がもつ特質と限界をまぬがれてはいない。複雑化した社会全体の動向を語るには、その社会に対する認識は限られており、また時に動揺している。激動の時代の社会運動に従事しているが故に体制や権力との距離にもゆれが見られる。しかしながら、一定期間の日記を通観することによって、一知識人が国の独立と、社会の統合と、家庭の安寧を追い求めた日々を、「日記」によって共に追体験することは、同時期の歴史像を形成する上で裨益するところなしとしない。まして馬千里については、五四時期についてみるかぎり、生活そのものが時代の主流をなす社会動向とともにあり、加えてその活動が後に首相となる周恩来と協働するものであったところから、関連する資料があり、そうした他の資料のなかで「日記」を読むことができるため、一定の客観性を保つことが可能なのである。そうした意味も含めて、以下には「馬千里日記」をよみ、その前半生の中から特に活動の中心をなす五四運動と馬千里との関わりについてみていくこととする。

## Ⅱ. 「馬千里日記」をよむ —特に前半生について—

### 1. 1919年五四運動と馬千里

「馬千里日記」が書かれた時代にはほぼ重なる中華民国前期は、歴史の形成に当って中間的知識層の担った役割が大きかった時代であった。それは、一言で言えば、清末以来知識層のなかに芽ばえた「国民」意識が、辛亥革命をへて民国に移行する中で明確なものとなり、さらにそれが列強の競いあう国際関係のなかで自国の命運を憂える諸運動をとおして商業者など広範な都市民にもひろがりをみせ、さらに党派的分化をみせながらもより広範な国民各層に浸透していった時代であったといつてよいであろう。五四運動はその途上に位置したものであった。そして更に1920年代なかば、こうした国民意識の広がりと熟成が社会的底流となつて、北京政府統治と対抗するものとなり、国民革命期を経て南京国民政府成立へと時代が転換したと考えられる<sup>1)</sup>。であれば、若い知識層であった馬千里及び彼の仲間たちが、どのようにこの潮流に参加したのか、彼らは時代状況を如何に認識して運動に加わったのか等を見ることは、この時代を改めて捉え認識する上で有効であろう。先にも述べたが、日記によって一人の人物の等身大の行動と決断、また行間から溢れてくる苦悩を知ることからは、現在描かれている歴史記述の、その基層で生きた人々をより身近に感じることとなる

う。そして本稿が特に五四時期に注目するのは、日記全体を通観したとき、馬千里自身が最も大きく変わる時が「五四」の時であったからである。このとき馬千里は日々の生活の煩いのなかにありながらも、身辺事情よりも「救国」という社会的活動により高い優先順位をおく姿勢へと明らかに変化をみせたのであった。

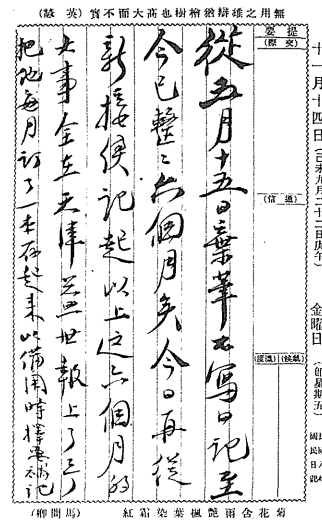
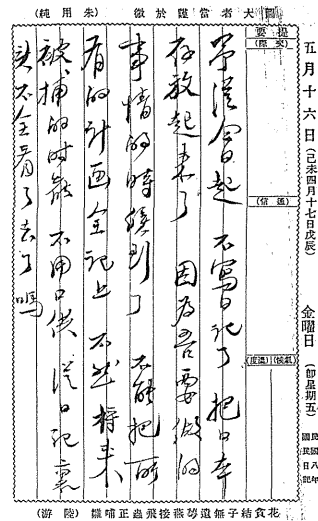
さて、「五四」とは、1919年5月4日に首都北京の学生によって行われた示威行動が、その後、全国各層の民衆運動に発展し、その主張が国家の意思決定にも影響を及ぼしていったところから、この間の一連の動きを総称して「五四運動」といい、この運動を間にして前後に影響のおよぶ期間を「五四時期」と呼ぶのである。——確かに、五四運動についての性格付けや期間については、従来から論争があった。現在までのところ、それはパリ講和会議に向けて展開された山東主権回収運動を中心とした一連の動向を指すとされている<sup>12)</sup>。しかし本稿は一人の知識人の継続的な社会活動を追うところから、対象とする期間を更に広くとって、五四を遡る時代や運動前夜、1919年そして20年の状況をも扱うこととする。

では、五四運動そのものの背景および経緯とともに、馬千里の五四運動との関わりについてみてみよう。

1914年7月、第一次世界大戦が始まると、日本はドイツへの宣戦布告とともに山東省での軍事行動を開始してドイツ租借地（青島）を占領し、さらに権益の拡大を求めて1915年1月「二十一か条要求」の受諾を迫った。時の袁世凱政権はこれを受け入れたが、しかし戦いが終わると、中国は戦後のパリ講和会議においてその解消と山東の主権回復をもとめた。そして1919年4月末、その要求が却下されることが明らかになると、この報に接した学生たちが、5月4日、北京において抗議集会をひらき、講和条約の調印拒否と親日三官僚の罷免要求を決議したのである。また「二十一か条条約破棄」「青島返還」を叫んで示威行進を行った。しかもこの運動は、翌日から上海、天津など各地にもひろがりをみせ、やがて7省27都市にもおよぶ広範な地域の大規模な運動となり、参加者も学生にとどまらず商工業者、労働団体、省議会、民衆団体など多様な層へと拡大した。運動の形も大戦期の経済発展を反映して、主に日貨ボイコットと救国貯金運動として展開された。このため運動の更なる拡大をおそれた政府は、ついに要求をいれて、6月にはいると曹汝霖、章宗祥、陸宗輿ら3名の罷免を決定したほか、ベルサイユ条約の調印を拒否した。これは権力を持たない人々の力が国家の決定にも影響を与え得たという点で中国ナショナリズムの高まりを示すものとされている。しかも運動はこの後もさらに続いた。

この五四運動が馬千里に与えた影響がいかに大きなものであったかは、天津における運動がはじまった直後にあたる1919年5月16日の日記が何よりもよくそれを物語っている。

私は今日から日記を書かないこととした。日記



は預けてしまうこととする。それは私が成すべきことを成すときがきたからである。日記に全ての計画を記してはいけない。(そんなことをしたら)今後逮捕されたときに、供述しなくても、日記から全てがわかってしまうことになるではないか。

即ち、この日の記述は、自らの今後の活動が逮捕に及ぶ可能性もあるものだという認識と、それでも活動が続けようという強い意志を示している。そしてこの日記を書かない期間は、以下のとおり、同年11月14日まで続いた。従って、全国において、また天津において最も激しい運動が行なわれた半年間の馬千里の日記は、ない。ただ彼にとっては、下記の記述から見て、その間は個人の寧日なく、『益世報』がまさに日々記載する「出来事」とともにあったということであろう。

5月15日<sup>13)</sup>に筆を折ってからちょうど6か月、日記を書くことなく今に至った。その日記を今日から再び書きはじめることとする。この6か月の重要な出来事はすべて天津の新聞『益世報』に載っている。私は、時間があるとき書き足すことができるように、(同新聞を)月ごとに1冊にまとめて綴じ保存している。

ここからは、次に、二つの点を明らかにしなければならない。①何が馬千里にこのような決意をもたらしたのか。いつ、どこにその結節点があったのか——。②この後、馬千里はどのようにこの決意を継続したのか——。

## 2. 1919年以前の馬千里

上記①の問いについては、当然時期を遡ってみなければならない。その際、1917年1月15日の以下の日記が一つの鍵になるものと思われる。

私は最近考え方が従来と大きく変わった。これまでの考え方は南開思想とも言うべきもので、自身の道徳性の向上進歩が最大の関心事であり、世間の汚濁とは一線を画すものであった。だが今はそうではなく、この無名無勢の時にあっては、むしろ社会性を増し、より多くの友人と知り合い、交わっていくことが大切だと思っている。

この故であろうか、「日記」には、このころから政治の動向や、社会的諸問題、そして国際関係等を考えようとする積極性が目立つようになる。例えば、馬千里は、この年4月末から天津教育考察団に参加して日本を訪問することとなったが、その際も出発に先立って催された南開教職員の出発会で、日本で考察すべき課題を引き受けている<sup>14)</sup>。即ち、「日本の学生が勉学に励む動機は何か」、「何故彼らは努力するのか」、「日本の実業振興は小学校教育の充実とかかわりがあるのか」、「教育と愛国の関係は何か」、「生徒の管理と放任をどう考えているのか」、「職業教育の要は何か」等々。これは、既にこの段階で彼の中に、日本と比較した自国の国家像、そこで教育が果たす役割への想いがあったことを物語っている。そして実際の視察は、4月30日～6月29日の間、35校に上る小学、中学、高校、師範、大学を対象として行なわれた。在日の中国留学生との会合ももたれた<sup>15)</sup>。従って上記課題に対する考察や見解が、馬千里のなかには当然あったと思われる。だが残念なことに、旅行期間中の日記には学校視察の記録はほとんどない。その理由は、おそらく馬千里が別途視察に関する「東遊日記」を記録したゆえであろう<sup>16)</sup>。むしろ、この間の「日記」から見えてくるものは、旅行期間中に馬千里が日本の対中国政策に一種の危惧を抱いていた様子である。6月13日の日記の一節は次のように結ばれている。「東の隣国日本では、三党が手を携えて中国への謀をめぐらすべく外交特別委員会を組織している。我々中国の民は滅亡してしまうのか。哀しいかな。」<sup>17)</sup>これは、日本の寺内

内閣が、臨時外交調査委員会を設け、外交を議会の審議から分離することによって首相の判断でことが進められるようにはかり、西原借款によって中国支配を実効的に進めようとした事態を知った馬千里の慨嘆である。このとき、馬千里が、日本の一つ一つの政策の本質について何処まで理解していたかは定かではない。しかし、訪日を契機にして当時の日本の一連の動向から自国への危機感を深めたという点は、こののち五四時期に至って運動に身を投じていく一底流となるものであったと思われる。では、底流という意味で、更に時を遡ると、どのような状況が見えてくるのであろうか。ここでは「日記」から、1917年以前の状況を簡単に振り返っておこう。

先述したように馬千里は中国社会の近代化に強い意欲をもち、民国の成立による喜びを感じていた。従って、共和に対する思いと、その共和国を脅かす外からの主権侵害に対する憤りとは、民国成立以来馬千里のなかに一貫して見てとれるものであった<sup>18)</sup>。但しそれが、初期の段階では、あくまで彼自身の内面にとどまるものであって、行動に移されるものでなかったことには注意しておくべきだろう。例を挙げれば、1915年の日本による「対華二十一か条要求」は、のちの五四運動の解決課題の一になるものとして重要だが、「馬千里日記」には只一か所、5月10日の一節として次のようにでてくるのである。「袁世凱政府はすでに‘二十一か条’を承認した。中国は亡ぶのか、学校のなかでも皆悲しみ憤慨している。辛いことだ。」そして、このころの日常生活からみる限り、馬千里の最大関心事は、学校のなかの演劇活動なのであった。

同様に、共和を重んじる姿勢が「日記」のなかで鮮明に見えるのは、1915年に始まる袁世凱による帝制への移行と、1917年の張勳による復辟の試みに対してである。以下の記述から見て、共和体制を壊すものに対する彼の怒りは明らかであろう。

・楊度、嚴復らが籌安会を組織して共和制を君主制に変えようとしている。国家が減ぶときには、必ず妖気ある悪人がでてくるものだ<sup>19)</sup>。

・雲南の唐繼堯が帝制に反対し独立を宣布した。うれしいかな、中国に尚一縷の生きる望みがあるのか<sup>20)</sup>。

・天津商會が袁世凱の皇帝即位を祝って提灯行列をした。下等な社会人たち<sup>21)</sup>

・(袁死去の報) 今日袁世凱に天誅がくだった<sup>22)</sup>。

また1917年、張勳による復辟が試みられたときには、馬千里はその一連の事態を「滑稽で短命な政治劇」と断じ、一日にして変わっていく政治状況を、そこに関わる名前を一人ひとり書き上げつつ記録している。だがここにも、時代を冷静にみ、怒りを覚えつつも、なお実践には移らない知識人の姿があるといえよう。

・警察が家々にみな黄龍旗を掲げよと通知し、宣

統復辟のことを知った<sup>23)</sup>。

・夜、天津に黄龍旗を降ろして民国五色旗に換えよとの命令があった。黄龍旗は天津では3日翻ったのみ。(中略) 朝張暮李、この恥<sup>24)</sup>。

以上、1917年に至る間の馬千里による政治や社会に対する心情をみたが、こうした底流に加えて、こののち何が生じたのか——後の五四時期における馬千里の変化に連なると思われる動因を、ここでは、1917年及び18年の「日記」の中から二点ほど拾っておこう。

その一は、1917年9月天津を襲った水害と、水害への対処が彼に与えた影響である。9月23日、天津は海河、北運河など一帯の河川の氾濫によって、西門外、南門外から南市一帯、そして租界まで多くの地域が水に浸かった。それは、6万6千家屋が浸水、2万余家屋が倒壊、10万人が被害をうけ、排水と鉄道の復旧までに2か月を要したという大水害であった<sup>25)</sup>。このとき馬千里は自ら勤務する女師学校に官立、民立の女子学校の教員をあつめ、女校聯合水災急賑会をたちあげて綿衣をあつめ、被害を受けた人々への救済にあたった。また、南開学校を中心に救済水災研究会を組織し、難民の実態調査にあたった<sup>26)</sup>。そして、これが馬千里にとっての最初の組織化による社会的活動であり、実践に向かう第一歩だったのである。

その二は、1918年、謂れのない中傷によって職を辞し、向かった上海で孫文に出会ったことである。次第に活動的となった馬千里に対し、この年は中傷の多い年であった。5月「中日密約」といわれる「日中共同防敵軍事協定」調印の報に接して天津の学生に組織的動きがみられたとき、彼が運動を支持すると、新聞には「馬千里は学生を誘惑している」という中傷記事がだされた<sup>27)</sup>。更に9月になると馬千里と女師学校の名譽を傷つけるようなビラがまかれ、直隸教育庁から調査員がやってくる事態が生じた。それは無根であることが証明されたものの、彼は学校と校長への打撃を考えて職を辞し上海に向かった<sup>28)</sup>。そして12月、折から上海にかえり著述に専念していた孫文に出会ったのである<sup>29)</sup>。馬千里は生涯にわたって孫文を尊崇していたといわれる。従ってこの出会いが彼に何ものかを与えたであろうことは想像に難くない。そしてこの直後に孫文が発表する「行易知難説」(「心理建設」)が、社会的実践、革命的実践に重きをおいた学説であったことを考えると、彼もまたなにがしその影響を受けたのではないかと思われるのである。またこのときは第一次世界大戦が終結したばかりのときであり、上海ではのちの国民大会に連なる和平聯合会が成立したときでもあって、様々な刺激にみちていたのではないかと考えられる。

以上が五四に先立つ時代の馬千里についてである。次には、先の間②に答えるべく五四以降の状況をみることにしよう。

### 3. 五四時期後半の状況と馬千里——特に国民大会について

1919年5月4日に始まる全国的な五四運動については研究も多く、その状況は既に少なからず明らかにされているので、今ここにそれを繰り返す必要はないであろう。また、天津についても、特に1919年の状況に関しては極めて詳細な研究がなされているところから、ここに改めて述べるには及ばないであろう<sup>30)</sup>。加えて馬千里についても、先述したように、この年の5月から11月の間は「日記」が残されていないため、その期間については何ら新しい情報を追加することができない。従って、むしろここでは、同年12月から急激に高まりを見せる国民大会開催の動きに注目し、そこから筆をはじめることとする。そこからは馬千里についても、11月に「日記」が再開されたことによって、彼がどのような形で運動に参加していたのかを知ることができるからである。この時点でみれば、彼はすでに天津の諸運動の中に深く関わっており、天津各界聯合会副会長、日貨排斥委員会主席をつとめつつ、運動の再活性化に力をつくしていた。その成果が「国民大会」であったということができよう<sup>31)</sup>。馬千里の「日記」には、12月4日を皮切りに国民大会の動向が頻繁に記載されるようになる。

そこで以下には、1919年12月から翌20年1月に至る間の、天津における国民大会の成立過程とその後の動向を、「馬千里日記」の記載を中心に辿ってみることとしよう。それは極めてスピーディーな運びであった。

#### 1919年

(12月初、天津各界聯合会は女界愛国同志会および学生聯合会に対し共に国民大会をひらくことを提起し応諾される。)

- ・ 12月4日：天津各界聯合会評議會は商会とともに国民大会を開くことを議決。
- ・ 12月5日：順直省議會及び天津總商会对し国民大会をひらくことを提起。
- ・ 12月8日：国民大会開催を呼びかけるピラを30万枚市中に配布。
- ・ 12月9日：總商會が参加を表明。
- ・ 12月10日：天津学生聯合会は(男女組織の統合による)新会を設立。
- ・ 12月11日：天津各界聯合会は馬千里と孟震侯を国民大会籌備員に選出。
- ・ 12月13日：参加27団体代表が集って国民大会籌備会を結成。大会の開催日時、場所、当日の活動計画などを討議。馬千里は積極的に意見を述べる。
- ・ 12月16日：国民大会籌備会を開いて大会に関する詳細な行動計画を決定。更に、幾つかの同業公會が加入。
- ・ 12月20日：国民大会を開催。
- ・ 12月24日：国民大会籌備会を国民大会委員會と改称。

#### 1920年

- ・ 1月2日：国民大会委員會は、五金、海貨、洋広貨各公會に続いて他の同業公會にも人を出して監督する必要があるかどうか検討。
- ・ 1月3日：国民大会委員會は、前日の結果により、五金、海貨、洋広貨各公會に商品販売の「許可証」を交付。
- ・ 1月5日：国民大会委員會は、同様に糖商、ガラス商、焼物商に商品販売の「許可証」を交付。
- ・ 1月19日：国民大会委員會は各商店における日貨調査について検討。
- ・ 1月21日：国民大会委員會は志大昌商店が私蔵する日貨をどうするか検討。
- ・ 1月23日：国民大会委員會は志大昌問題を検討、議決に至らぬ間に魁發成事件<sup>32)</sup>が発生。
- ・ 1月24日：国民大会委員會は前日の魁發成事件の始末について検討。その間に学生と警察の衝突があり、抗議に赴いた馬千里等16名が逮捕。
- ・ 1月27日：第2回国民大会開催。南開グラウンドに学生、諸団体、市民ら10万余が参加。山東問題の直接交渉反対等を決議。大会後、老鉄橋まで市中を示威行進。
- ・ 1月29日：学生抗議大会。逮捕者の釈放、日貨調査の再開、言論、出版、結社の自由、運動弾圧策の撤回などを要求。省公署に赴き衝突、その中で周恩来等4名が逮捕。
- ・ 1月30日：天津学校教職員抗議のストライキ。省長より日貨ボイコット運動嚴禁の布告。(北京政府により天津に戒嚴令)

以上、馬千里の「日記」から天津の国民大会形成前後の過程をたどったが、では、このときの国民大会とは如何なるものであったのか、そして馬千里はそこでどのような役割をはたしたのか、他の関連資料をあわせつつその状況を明らかにしてみよう。

#### (1) 国民大会とは何か——天津1919年12月、20年1月

先に注記したように、「国民大会」には上海を中心として五四に先立つ前史があり、五四運動に際しても、1919年5月、6月の間には、広州、上海、雲南、貴州などの地で、同名を冠した運動が展開されていた。天津においても、5月には、学生聯合会がその開催を主張しており、「日記」にも「学生組織演説團が国民大会を開く予定だ」との記載がある<sup>33)</sup>。但しそれらの動向と、ここに取り上げる一連の動きとの関連或いは系譜関係については現在のところ明らかではない。そこで、以下本稿で述べる国民大会については、1919年12月から1920年1月にかけての、馬千里らが中心となってすすめた上記の一連の運動に特定して考えてみることにしたい。

端的にいうならば、この時期の資料にみられる「国



民大会」という記載からは、第一に、大規模に行なわれた集会という意味と、第二に、この集会を契機にその必要性が明示された広範な常設的な組織或いは機構という二つの含意を認めることができる。そこで先ず第一の形を、天津『益世報』の幾つかの記事からみてみよう<sup>34)</sup>。

それは、1919年12月20日及び1920年1月27日に、南開学校グラウンドに市民約3万人、同10万人を集めて開催された、ともにまさしく大規模な集会であった。つまりこの集会を「国民大会」というのである。そしてそこには誰が集ったか参加メンバーを確認すると、それは学生联合会、省議会、総商会、銀行行会、錢業公会、米業公会、五金行同業公会、綢緞布匹公会、織染公会、洋貨公会、当商公会、三津磨坊、律師公会、油漆彩扎十人団、実業儲金会、紅十字医隊、北洋大学、南開大学、南開中学、中西女学、省立第一中学、女子十人団、閩津水会、広東旅津同郷会、福建旅津同郷会、山東旅津同郷会、国貨調査会、十人団、公教救国団、耶蘇教救国祈祷会、童子軍、商団、市民など、五四以来天津の運動を形成してきた多数の団体からなるものであった<sup>35)</sup>。またその目的及び主張についても、大会に参加した団体の多数の旗幟に「山東、福建を救い、一致して救国にあたろう」「日貨をボイコットし、国貨を提唱しよう」「青島を救え、匹夫も責あり」「国恥を雪ぎ、国難にあたろう」などとあったところから、それが五四運動からの課題を引きつぎ、その運動の再活性化をめざすものであったことは確かであろう<sup>36)</sup>。この継続性は重要である。だが天津の場合は、折からおこった福州事件及び日本の船津天津総領事による人事介入問題が大きく加わり、ここに新たな運動が立ち上げられたのではないと思われる。しかも、1920年1月、運動が根強いボイコット運動の傾向をみせるようになると日本領事館が再度動き、警察庁が介入し、国際問題化の懸念の中で省長までもが動きはじめ、馬千里、周恩来ら20名余が逮捕されて、運動は再び沈静化していったのである。このときの国民大会は、そうした大きな流れを反映して催された運動であった。

## (2) その特徴は何か

では、この国民大会の特徴は何であったといえるのだろうか。国民大会形成の経緯、同大会の宣言や布告、関係者の発言、そしてその後の展開過程などからこの点を考えてみよう。そこには以下の特徴がみられる。

① 運動の意味が「国家」の問題であり、「国民」が参加し自救すべき問題であると明確化され自覚されていたこと。

12月20日開催された国民大会における「天津国民大会宣言書」をみると、そこには、全国に各界聯合会が成立した現時点の情勢分析にはじまり、今が即ち「救国」のときであること、そのためには何よりも自ら国を救うべきことが明らかにされている<sup>37)</sup>。国民は受動的であってはならず、この事態の解決に自ら当たるべきであり、それが国民大会を開催する所以であるとさ

れているのである。そこでは「国民」の存在が強調され、国難を救う原動力はそこにのみあると宣言されているのであって、この点が「国民大会」という呼称の新しい自覚的な意味であったと考えられる。

② 大会開催の方法が、闘争的であったというよりは、むしろ秩序重視であったこと<sup>38)</sup>。

この点については、大会の準備段階における代表たちの発言が繰り返しこの点を強調しており、運営も平和的な方法をとることが定められていた<sup>39)</sup>。運動形態のなかでは、ボイコットという方法自体が平和的方法として選ばれたとされる。関係者たちは少なくともそう認識していた<sup>40)</sup>。更に、大会当日も会場内外の秩序維持に対しては強い関心が払われ、場外については商団が、場内については学生童子軍がその任務を担当すると定められていた。医学校や紅十字会は会場に救急センターを作る措置をとっていた<sup>41)</sup>。こうした措置は、警察庁の介入を避けるための、むしろ積極策であったと推測される。また、この点は、従来からこの時期の運動が「非暴力、理性、民主主義への熱い信仰」という傾向を帯びているとされてきた点を裏打ちするものであろう<sup>42)</sup>。だがそうであったため、翌1月下旬、第2回国民大会に際して、馬千里らの逮捕をめぐって衝突がおこると、政府側は強圧的な方向を露にし、天津に戒厳令をしいた。そのため天津の運動は明らかに下降していったのである。

③ 大会の開催を契機に広範で常設的な組織或いは機構が生まれたこと。

この点こそ、先に述べた国民大会の第二の意味であり、同大会がみせた新たな特徴を示すものということができよう。この点については、何よりも「検庁日録」の記述が参考になる。「検庁日録」とは、既に述べたように、国民大会をめぐる運動の中で逮捕された馬千里、周恩来ら20数名が、1920年4月2日に天津地方検察庁に送られてから7月17日に釈放されるまでの間の出来事を、周恩来が日記録の形で記したものである<sup>43)</sup>。そして周恩来は、釈放後ほどなく渡仏したため、それを馬千里に託し、馬千里が修正補充したのであった。そこには検察庁内に収容されていた彼らの日々の生活が詳細に記されていて興味深い。更に加えて一部裁判時の尋問や、検事、弁護士が書き加えられているため、そこからさまざまな事項に対する馬千里等の認識や、検察及び裁判官の認識が見えてくるのである。そして裁判官は、彼らに対して繰り返し「国民大会」について尋問し、彼らはそれが「紳界、商会、報界など8機関から成る天津各界聯合会を基盤とし、そこに天津の30余の団体が、各二、三の代表を挙げて加わり、その全体が国民大会籌備会(委員会)を構成」したものであると説明している。またそのなかの総商会、公教救国団、耶蘇教救国祈祷会、学生聯合会と、女界愛国同志会、回教会、紳界、報界からなる組織が「天津各界聯合会」であって馬千里はこの代表の一人であるが、馬千里自身が本来帰属していた機関はそのなかの耶蘇教救国祈祷会であることを述べている<sup>44)</sup>。



このように見てくると、この時の国民大会籌備会の下には多くの組織が段階的、重層的に位置づいていたのだということが判明するであろう。つまり、国民大会とは、当時都市天津に存在していた諸団体の総体であり、籌備会（委員会）を代表機関とする一つのまとまりある機構であったということである。しかもそれは急速にその自治的傾向をつよめていた。それは、「日記」にみられる次のような事例からも明らかであろう。「国民大会委員会は、五金、海貨、洋広貨各公会に商品販売の「許可証」を交付することを決めた」<sup>45)</sup>「国民大会委員会は、糖商、ガラス商、焼物商に商品販売の「許可証」を交付することとした」<sup>46)</sup>。ここからは、国民大会委員会が、広く参加の団体に対して商品販売の可否をきめる権限をもち、それを執行していることをみてとることができる。

このとき天津の国民大会は、準備段階からすでに「今や国民自決のときであり、官府の同意は不要である。国民が自決すればそれでよい」と主張していた<sup>47)</sup>。この傾向は、国民大会の下部に位置する学生聯合会が「調査委員会章程」を定めていること<sup>48)</sup>、国民大会委員会も同じく「調査委員会簡章」<sup>49)</sup>や「日貨公売処章程」を公布して日貨の取り扱いについても種々定めていること<sup>50)</sup>、同業（行）公会所属の組織も日貨について守るべき決まりを定め、違う場合は処罰すると明らかにしていること<sup>51)</sup>、などからも明らかである。そのため「日記」の記載にもあるように、各行商は日貨の在庫数を明らかにし、国民大会委員会に対して、その定める販売方法を守る旨書面を提出しなければならなかった。提出すれば随時「許可証」を交付するが、提出しない場合は商品の陳列、売買を認めないとされていたのである。このような国民大会が各商店営業の許可、不許可までを決定する仕組みは、まさしくこの機構が自治的機能をもつに至った証であろう。それは、あくまで一都市範囲の規定であり、短期間であったため定着することなく終わったが、この事態は、国民大会が広範な組織を集めた存在として都市内部を自治的に統合しようという機能をもち、既存の政治機構に対抗するものとしての要素を萌芽的に備えていたことを示すのではないかと考えられる。そして、それが可能であった理由は、やはり五四運動を経験した都市市民の政治的自覚によるものであり、馬千里は国民大会のなかにそうした方向性をみいだして希望をもったのではないかと考えられる。

そして「日記」から見る限り、国民大会は、馬千里にとって、変わることのない関心事であった。逮捕期間もふくめて、この年の日記には「国民大会」という記載が繰り返し登場する。逮捕期間についていえば、彼ら逮捕された20名余は1グループとされて検察庁内で弁護士と接見するのだが、その際彼らは各問題別の担当者を決めていた。そして馬千里が「国民大会」問題担当になっていたのである<sup>52)</sup>。それは彼自身の逮捕が国民大会運動に起因したからであろうが、同時に彼がその運動の目的、方法に大きく関与し、それをよし

としていたからであった。事実、釈放後も馬千里はなお強く「国民大会」を求め、各界聯合会の集まりに出ては大会の開催を推進し、9月に入るとその具体化に取り組んだのである<sup>53)</sup>。ただこれは確たる成果がでぬまま終息し、馬千里は新たな啓蒙活動である『新民意報』の創設に向かうのである<sup>54)</sup>。

以上、「馬千里日記」によって彼の前半生をふりかえってきたが、その経緯から見て「国民大会」は、馬千里がそれまでの活動のなかから行き着いたところであったといえるだろう。清末以来、近代化を求め、共和を重んじ、民族の独立を求めてきた心情の上に、新たに行動し実践することをよしとする規範が加わり、それらが相まって彼を天津における五四運動の中心人物の一人とした。馬千里は、何よりも組織化を重んじ、天津という範囲内ではあるが、より高次の組織を創り出し、そこに全体を統合しつつ人々を動かしていく自治的な力を持たせたいと願っていた。おそらく天津市民による自治的機構が目指されていたものと思われる。それは逮捕によって結果的に中断を余儀なくされたが、馬千里のなかでは変わることなく生きつづけていたものであった。それが次に着手した、後半生をいどる人々を啓蒙するための新聞の発刊に繋がるものであったと思われる。

「馬千里日記」は一個人の日記であるところから、各時期について、その社会を覆っていた思潮や諸勢力によるダイナミックな運動の全体像については特に語るものではない。しかしそれは、時代に添って生きようとした一人の人物の日々の記録であるがゆえに、そこからは、この後もふくめて、関わった運動の動向、その高まりや退潮、共に生きた若者たちの模索の跡等を知ることができるのである。

## 注

- 1) 「ああ、世界の男女不平等は何と久しいことか。インドの女は夫の死に従い、日本の女は身を屈して夫に仕え、欧米では一夫一婦の平等といわれながらも参政権、選挙権はほとんど得ていない。翻ってわが中国を見れば男は女を人として遇さず、結婚においても男は三妻四妾が可能であり、女は終身一夫につかえなければならない。名分においても夫は天、妻は地の男尊女卑である...」『馬千里日記』（以下「日記」と略記する）1908年5月8日。
- 2) 「日記」1911年2月3日。
- 3) 「日記」1911年7月31日。
- 4) これは天津で第1回の新式結婚式であったとされ育青学校の講堂で行われた。その儀式は保証人と双方の家長及び友人の前で新郎新婦が礼をするもの。その後來賓が祝辞を述べ、写真を撮って散会した。新婦は藕色の上着と青色の長いスカートを着用。新家庭のための布団とカーテンは生地のままの愛国布が使用された。「日記」1910年9月30日。
- 5) 「日記」1910年3月6日。
- 6) 「日記」1917年2月11日。
- 7) 「日記」1917年6月17日。
- 8) 「日記」1917年9月16日。

- 9) このため同年8月、南開学校学生であった周恩来が日本留学を希望すると、馬千里は資金を集める手助けをし、自らも出資したのである。「日記」1917年8月23日。『周恩来与馬千里』馬翠官編『二十世紀初天津愛国教育家馬千里先生』（中国人民政治協商会議天津市委員会文史資料研究委員会発行、1985）38頁。
- 10) 「馬千里の家庭与生活」同上48頁。
- 11) このような当時の状況については、坂野良吉『中国国民革命政治過程の研究』（校倉書房、2004）、栃木利夫、坂野良吉『中国国民革命』（法政大学出版社、1997）など参照。特に前者からは大いに教示を受けた。
- 12) 五四運動については既に多くの研究がなされている。中央大学人文科学研究所『五四運動史像の再検討』（中央大学出版部、1986）、京都大学人文科学研究所編『五四運動の研究』全5函（同朋舎、1982～92）など参照。
- 13) 馬千里にとっては5月16日の上記表明は日記ではないということで5月15日としたのであろう。
- 14) 「日記」1917年4月10日。
- 15) 「日記」1917年6月2日。
- 16) 馬千里の「東遊日記」は4章からなり『女師校友会会報』（第4期）に掲載されたというが、現在未発見である。
- 17) 「日記」1917年6月13日。
- 18) 「日記」1912年1月23日、同2月15日、同2月21日、1915年8月15日、同11月16日、1916年1月2日、同3月22日、同6月6日、1915年2月3日など。
- 19) 「日記」1915年8月15日。
- 20) 「日記」1915年12月15日。
- 21) 「日記」1916年1月2日。
- 22) 「日記」1916年6月6日。
- 23) 「日記」1917年7月2日。
- 24) 「日記」1917年7月4日。
- 25) 天津市地方志編修委員会編『天津通志 大事記』（天津社会科学院出版社、1994）参照。
- 26) 「日記」1917年9月22日、23日、24日、27日、28日、29日。
- 27) 「日記」1918年5月23日。
- 28) 「日記」1918年9月30日、10月12日。
- 29) 「日記」1918年12月4日、7日、11日、14日。
- 30) 片岡一忠『天津五四運動小史』京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』第一函2（同朋舎、1982）。これは天津における運動の発端（1919.5）から挫折（1920.1）までを解明したものであり極めて詳細である。また、林原文子『宋則久と天津の国貨提唱運動』同前書所収、第二函6（同朋舎、1983）も同時期の天津を描いており参考になる。
- 31) 「国民大会」には1918年から五四に至る間の上海を中心に、主として国民党系の運動として展開されてきた歴史がある。その性格は時期により場所によりさまざまであったが、全体に共通する性格は参加団体の幅の広さと、政治的闘争を行なうというよりは、日貨ボイコットや商人のストライキを中心戦術としたものであったとされる。ただし、天津の場合も含めて、「国民大会」という名称の同一性をもってそれらを一括論することは避けなければならない。上海の国民大会については、末次玲子「五四運動と国民党勢力」『五四運動史像の再検討』（中央大学出版部 1986）参照。五四時期の国民大会については、中国社会科学院近代史研究所編『五四愛国運動档案資料』（中国社会科学出版社、1980）参照。
- 32) 魁発成事件とは、馬千里らが逮捕にいたる契機となった事件である。即ち、1月23日学聯の調査員が同洋雜貨商に赴き、在庫の日本商品が無届だとして押収したところ、日本総領事館の関係者と紛争になり、これに対し、船津公使が省長公署及び警察庁に抗議したため、警察庁長楊以德が巡警100名を出動させ、学生の一部を逮捕、更に国民大会委員会から抗議に赴いた馬千里ら代表7名等をも逮捕した。この経緯については、前掲片岡書に詳しい。
- 33) 「日記」1919年5月15日。片岡前掲書8頁参照。
- 34) 天津益世報の記事については、『益世報天津資料点校編（一）』（天津地方志叢書）（天津社会科学院出版社、1999）に掲載されている他、天津歴史博物館・南開大学歴史系編輯組編『五四運動在天津（歴史資料選輯）』（天津人民出版社、1979）に採録されている。
- 35) 「十二月二十日国民大会召開情形」前掲『五四運動在天津』481頁。
- 36) 同上
- 37) 宣言の一節は次のように述べている。「今、福建事件の発生に遭うこととなった。各省は次々と国民大会を開き、わが天津の人々も義憤で胸一杯にしつつ立ちあがって外交の後ろ楯とならんとしている。国民自決の進歩は中華民國の大いなる幸いである。」「天津国民大会宣言書」前掲『五四運動在天津』486頁。
- 38) 前掲『五四運動史像の再検討』310頁参照。
- 39) 「天津総商会報告国民大会籌備情形」（『天津益世報』1919年12月20日）、「十二月十四日国民大会籌備會議情形」（『天津益世報』1919年12月16日）など。前掲『五四運動在天津』471頁、475頁参照。こうした点からは、前年の上海における運動との共通点を見出すことができる。
- 40) この点に関しては準備段階で五金同業公会代表から日貨焼却にたいし「商家が購った物品を焼却するのは損失であり容認できない、それは愛国ではなく害国だ」との意見もだされ、この点は、最終的により大きな救国という目的のために焼却が行なわれるとされたものの、全体的な傾向としては破壊的行為を避ける傾向がみられた。「天津各団体為組織国民大会所發公函」前掲『五四運動在天津』469頁。
- 41) 「上海『申報』報道天津国民大会盛況」前掲『五四運動在天津』483頁。
- 42) 前掲坂野書34頁参照。
- 43) 「検庁日録」、周恩来『周恩来早期文集』（南開大学出版社、1993）所収。なお逮捕直後の1月24日から4月2日までのことは、同じく周恩来が編修し『文集』に収載されている「警庁拘留記」によって明らかになる。尚、この時混乱の中で逮捕されたものは20数名であったが、4月に天津地方検察庁に送致されたものは21名であり、うち2名が6月に無罪として釈放され、途中1名が加わって、最終的に裁判によって判決を受けたものは以下の20名であった。（ ）内は年齢。馬千里（37）、馬駿（26）、孟震候（35）、楊明僧（51）、夏琴西（30）、時子周（42）、于駿望（18）、郭緒榮（21）、陳宝驄（23）、師士苑（20）、李散人（25）、沙主培（20）、李少蓮（23）、李培良（18）、祁士良（19）、尚墨卿（20）、周恩来（23）、于蘭渚（21）、張若名（20）、郭隆真（25）。彼らのその後の動向は、運動の系譜との関連で興味深いものでありそれを明らかにすることも今後の課題である。
- 44) 前掲「検庁日録」571頁。
- 45) 「日記」1920年1月3日。

- 46) 「日記」1920年1月5日。
- 47) 「天津各団体為組織国民大会所発公函」前掲『五四運動在天津』469頁。
- 48) 「学聯調査委員会成立併発布章程」同上493頁。
- 49) 「国民大会委員会発布調査委員会簡章」同上499頁。
- 50) 「国民大会委員会通貨日貨公売処章程」同上501頁。
- 51) 「五金同業議決処罰条例」同上509頁。
- 52) 「検庁日録」、前掲『周恩来早期文集』547頁。
- 53) 「日記」1920年7月29日。この段階で各界聯合会が扱

っている問題は幾つかあったが、その1が国民大会であり、その2が地方自治を回復する問題であった。

54) 『新民意報』の創設は1920年9月15日。社会問題を討論し、平民政治を提唱することを宗旨として、進歩的な意見を掲載し青年学生や知識人から大いに歓迎されたというが、現在、本紙が残されているかどうかなお不明である。

(平成18年11月1日受理)